

研究所

明治学院大学 社会学部附属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 TEL03-5421-5204・5205

所長 柘植あづみ

31号

だより



メールアドレス issw@soc.meijigakuin.ac.jp ホームページ <http://soc.meijigakuin.ac.jp/fuzoku/>

contents

- 1 所長ごあいさつ
社会学部附属研究所所長
柘植あづみ
- 2 調査・研究部門
- 3 相談・研究部門
- 4 学内学会部門
- 5 市民講座報告 / 研修会案内
- 6 2017年度社会学部附属研究所
プロジェクトの紹介
- 7 2017年度社会学部附属研究所
スタッフの紹介

1 研究所長になって、1年が過ぎた。右往左往しているうちに、事務局スタッフや所員の方々に助けられ、定例の事業も港区民大学講座（大学公開講座）も、無事に終えられた。1年前にこの「たより」に記したテロや移民排除を強める世界情勢は、アメリカが自国の利益優先を前面に打ち出した大統領を選んだことから、悪化していると思える。日本はどうか、どうなるのか、危機意識をもって見守りたい。

さて、このところ私が時間をとられているのは、生命科学・医学技術と倫理についてのガイドライン作成や、国の生命科学や医学に関する指針が守られているのかを審査・検討する委員会である。そのひとつ、人のゲノム編集研究について話題提供したい。

ゲノム編集とは、生物の遺伝情報の全体（ゲノム）から、病気や好ましくない性質のもととなる DNA の一部を切

り取ったり、好ましい性質にする DNA の塩基配列やタンパク質を組み入れる、文章の編集のような作業をすることである。

体細胞へのゲノム編集と受精卵へのゲノム編集があり、体細胞ゲノム編集には従来の遺伝子治療についてのルールが参考になるが、受精卵については新たなルールづくりが必要である。内閣府が中心になってこれからガイドラインづくりに入るという。

受精卵のゲノム編集をすると、その受精卵から生まれた子どもの遺伝子が改変され、さらにその子孫にも改変された遺伝子が伝わることになる。遺伝病や体質の究極の「予防」といわれる。それだけではない、ある能力や性質を増強（エンハンスメント）することもできる。筋肉を増強したり、養殖魚や家畜の食用になる部分の割合を増やすこともできる。作物の収穫量を増やす

性質の遺伝子や病気に強い遺伝子を入れることもできる。しかし遺伝子を改変した結果、他の遺伝子にどんな影響があるのか、部分の変更が全体に影響を及ぼさないのかは、これからの研究課題である。なにより、従来の遺伝子組み換えよりも技術的に簡単なのだそう。

生きもの全体（生態系）から見たときに、人の都合で家畜や作物のゲノム、あるいは人間のゲノムを改変することで、遺伝子プールと呼ばれる生態系のバランスを崩してしまうのではないのかという懸念もある。それは、一度崩せば戻せないバランスである。部分的な環境破壊では済まないだろう。

社会的な視点から考えるなら、予防すべき病気、治療すべき病気とされるものが、当事者からの訴えというよりも、科学者・医師の判断で決まっていくことが気にかかる。もし実施するとしても、動物実験などで安全が確認された上で、ゲノム編集とは何か、他の

代替治療はないのかななどを慎重に検討してから、応用のルールづくりがなされる必要がある。その際には、様々な「当事者」の意見を聴くべきだ。

それに研究材料である人の受精卵はどこからもってくるのか。いまのところ不妊治療をして残った受精卵を凍結保存してあるものを使うとされるが、研究者からは実験用に人の受精卵を作りたい、という要望もでてくるだろう。

病気や障害によって困難を抱えている人を救いたいという気持ちは尊いが、いったん次世代につながる受精卵の遺伝子改変をスタートさせたら、それを止めるのは難しい。国際競争力にばかり目を向けずに、人が幸せになるとはどうか、そのために科学研究はいかに使われるべきか、一般の人たちの意見も十分にとりいれてルールを設けるべきだと思う。無関心でいると、技術は際限なく進んでいく。

(所長：柘植あづみ)

これらの実績については研究所のサイトでも見ていただくことができます。

2014～2016年度には「大災害と社会—東日本大震災の社会的影響と対策の課題」と題して実施してきました。東日本大震災の被害を受けた地域では、時間経過とともに避難や生活再建などをめぐる新たな課題にも直面しています。そこには、過疎化、高齢化など事故以前から存在した困難が深くかかわっています。このプロジェクトでは、そうした普遍的課題にも視野を広げつつ、地域社会が抱える問題や各地での取り組みについて見てきました。その成果については、既刊および次号の『研究所年報』などに報告されています。プロジェクトとしては節目を迎えましたが、各担当者の研究や活動は今後も続いてまいりますので、引き続き見守っていただければありがたく存じます。

2017年度からは、「内なる国際化に向けた生活保障システムの再編」をタイトルに掲げた、新たな特進プロジェクトが始動しております。「外国につながる子どもたちへの教育支援と生活支援」、「外国人受け入れにかかわる生活保障システムの国際比較」、「横断的な支援に向けた実践的研究」、「地域社会のマルチエスニック化」という4つのテーマを軸にグループを組み、具体的な活動が始まったところです。現在のメンバーは、浅川達人、阿部貴美子、茨木尚子、大瀧敦子、金成垣、坂口緑、高倉誠一、柘植あづみ、野沢慎司、平野幸子、藤川賢、元森絵里子、安井大輔、米澤旦の他、石原英樹、鬼頭美江も支援メンバーとしてかわり、また研究所の外の研究者とも協力して、組織づくりを進めています。研究内容について紹介する紙幅の余裕がないのが残念ですが、いろいろな形で成果を発信していければと願っておりますので、今後ともご指導ご支援をお願い申し上げます。(主任：藤川賢)

研究所各部門から

2 調査・研究部門

「調査・研究部門」は、社会学・社会福祉学の調査・研究プロジェクトを中心に活動しています。その柱の一つは「一般プロジェクト」という科研費などによる研究の準備、補助、展開を目的とする単年度計画の研究です。これは、単独または少人数のスタッフによって個別に進められており、2017年度実施中のプロジェクトおよび代表者名は、本号の「プロジェクトの紹介」欄に記載されている通りです。

昨年(2016年)度実施されたプロジェクトは、「南アジアにおける立正佼成会の展開」(渡辺雅子)、「恋人獲得をめぐる競争行動が起きる状況要因の検討」(鬼頭美江)、「現代政治思想におけ

るポスト・コミュニタリアニズムの展開可能性」(坂口緑)、「東京都葛飾区における住民福祉活動の現状と今後の方向性に関する研究」(河合克義)、「自殺対策の歴史社会的検討」(元森絵里子)、「生活困窮者自立支援従事者の人材育成方法に関する研究」(新保美香)、「ステップファミリー支援プログラムのためのセミナー企画」(野沢慎司)、「生物学的思考とジェンダー概念との関係をめぐる文献学的研究」(加藤秀一)の8件でした。これらの研究成果は次号『研究所年報』(2018年2月刊行予定)などで公開される予定です。

また、社会学部付属研究所は創立以来、多くの共同研究を行ってきました。21世紀からは「特別推進プロジェクト」という名称のもと、両学科のスタッフを中心に学外からも多数の研究者の参加を得て、継続的に実施しています。

3 相談・研究部門

相談・研究部門はおかげさまで長年手がけてきた「子育て支援」の地域活動が、手を離れ独り立ちしてひと段落しました。まだ背後からの支えは継続していますが、活動の主流ではなくなりました。ということで昨年は、様々な家族を地域で孤立させないためという問題意識をもって「ステップファミリー」「ひきこもり」「介護離職」等をテーマとした地域創り担い手学習会を中心に活動して参りました。一回ごとに参加者の顔ぶれがかなり違い、当事者性の高い方たちのこともあれば、仕事上の必要性に迫られた行政のワーカーの方たちの多い回もありましたが、一方通行の講演会でない語り合いのグループやカフェのある会だったため、いずれも高い関心に驚きを感じさせられる活気のある学習会となりました。アドバンスト・コースではあまりにビッグ・ネームで恐れ多いなと思いながらもルーテル学院大学名誉教授の福山和女先生をお呼びしてしまいました。「ソーシャルワーカーの実践力の活性化」というテーマでしたが、いつもながら参加したソーシャルワーカーは自分たちの仕事を見つめなおし再評価して、元気をいただけたようでした。

本年も地域創り担い手学習会の問題意識は継続していこうと考えています。今年度は7月に「LGBT」をテーマにゲストスピーカーは遠藤めたさんを予



▲2016年度研修会

定しています。11月か12月にはテーマは「ひきこもり支援」で第二回目の学習会が持たれます。回数的には一回少くはなりますが、その分のエネルギーを精力的に研究活動に振り向けていこうと考えています。具体的には若者支援・ひきこもり支援機関、外国ルーツ家族・多文化/多言語家族への支援/交流団体の二方向を考えています。この6月から前者については具体的に4団体にヒアリング調査を予定しています。様々な成り立ちの団体が同一の対象者にどのような異なったアプローチをかけているか、興味の尽きないところです。

アドバンスト・コースについては昨年同様10月に、今年度は「ファミリーグループカンファレンス」「当事者が参加するケースカンファレンス」をテーマとして開催予定です。(主任:深谷美枝)

4 学内学会部門

明治学院大学社会学・社会福祉学会は、社会学部生・卒業生・教員の三者によって構成されている組織です。事務局は、社会学部附属研究所の中にあります。

活動としては、毎年6月に総会を開催して前年度の活動報告と今年度の事業計画及び予算を決定します。その後は特別講演会を開催し、懇親会を行います。



▲2017年度総会の様子

2017年度は6月17日(土)に総会を行い、特別講演会では濱野一郎先生のゼミ生でいらした長崎広氏をお招きしました。講演のテーマは「働く障害



▲講演者の長崎さんをまじえて

者への差別・虐待と闘う」とし、『人間を取り戻せ 一大久保製薬闘争の記録一』を上映してから講演をお願いしました。参加者は114名でした。

また秋には社会学部研究発表会を行います。昨年度は114名の参加があり、ゼミ参加9件、個人参加6件の研究発表がありました。この研究発表会は年々盛んになっており、内容も充実したものとなってきております。2017年度は11月11日(土)に開催を予定しております。

社会学部の1年生から4年生で構成されている学生部会の活動としては、秋学期に行う社会学科ゼミサロン、社会福祉学科コースガイダンス、社会福祉学科卒業生と在校生の交流会、映画会などがあります。

卒業生部会は、秋・春の講演会を予定しております。2016年度は3月に沖縄タイムスの福元大輔氏を演者にお迎えして「沖縄の今を語る 一基地問題を中心に一」とのテーマでお話を伺いました。約70名の参加がありました。

社会学・社会福祉学会の機関紙である『Socially』は毎年1回3月に発行し、現在は第27号の準備をすすめております。「学内学会会報」は毎年5月に発行しております。

本学会の活動は社会学部の在校生・卒業生・教員の協力により進めております。しかし最近は学生部会の人数が減る傾向がみられます。これは本学会にとって大きな危機となります。社会学部生の全員が、自分本学会に所属

しているという意識をもってもらうためにはどのようにすべきか、を検討していかなければなりません。大学生として、明治学院大学社会学部の学生として、研究に関わる様々な活動の場として本学会を活用していただければと願っております。(主任:岡本多喜子)

5 市民講座報告 / 研修会案内

2013年度以降相談・研究部門が取り組む課題は、「社会的孤立」。2016年度は、この課題に取り組む担い手のための「地域創り担い手学習会」を開催しました。メインテーマとして「地域の多様な家族が孤立しないために私たちができること」を挙げ、以下の3つのテーマで行いました。第1回テーマ「地域に暮らす多様な家族～ステップファミリーとの関わりに学ぶ～」(9月28日(水)開催、参加者33名)、第2回テーマ「ひきこもりと家族～生活困窮者自立支援制度の可能性～」(12月7日(水)開催、参加者50名)、第3回テーマ「介護も仕事も人生も…～苦悩する介護者への支援を先駆者から学ぶ～」(2月22日(水)開催、参加者31名)。本学習会は、社会的孤立を生まない地域をめざし実践する方たちとの学びの場として、またつながりを拡げる場としても位置づけ、ゲストスピーカーからのお話の共有と、参加者間の対話の時間も大切にしました。



▲2016年度地域創り担い手学習会

これまで10年間にわたり相談・研究部門が港区立子ども家庭支援センターと共催してきた、「港区地域こぞってネットワーク会議(6月開催)」と「港区地域こぞって子育て懇談会(1月開催)」。2016年度は、実行委員経験者により設立された一般社団法人みなとこぞってネットワークが、上記センターと共催することになりました。当部門は後方支援に回り、2016年度懇談会「今、子ども・子育て気になることなあ～に？」の企画/運営に協力しました(報告書をご希望の方は社会学部附属研究所までご連絡ください)。

(副手:平野幸子)

「第31回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」 総合テーマ「当事者参画によるカンファレンスを学ぶ～領域を超えて活かす試み～」(仮題)

日時:2017年10月28日(土)
10:00-16:30

内容:

●基調講演

「ファミリーグループ・カンファレンス(FGC)について」(仮題)

講師:林浩康

(日本女子大学教授)

「サインズ・オブ・セーフティ・アプローチ(SoSA)について」(仮題)

講師:鈴木浩之

(神奈川県中央児童相談所)

●全体ワークショップ

●ネットワーク懇親会

会場:明治学院大学白金キャンパス

●連絡先

明治学院大学社会学部附属研究所
〒108-8636 港区白金台1-2-37
Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp
TEL 03-5421-5204・5205
FAX 03-5421-5205

6 2017年度社会学部附属研究所プロジェクトの紹介

■一般研究プロジェクト

☆宇宙倫理学の基礎研究

(代表 稲葉振一郎)

☆歴史社会的日本研究の国際的対話に向けた基礎作業(代表 石原 俊)

☆性的マイノリティへの寛容性の質的研究(代表 石原英樹)

☆関係流動性の時系列的変化に関する検討(代表 鬼頭美江)

☆福島原発事故避難者の帰還について考える

一避難者の生活課題の分析を通して一
(代表 和気康太)

☆日系新宗教の海外布教

(代表 渡辺雅子)

■特別推進プロジェクト

内なる国際化に向けた生活保障システムの再編

7 2017年度社会学部附属研究所スタッフの紹介

所長	柘植あづみ
調査・研究部門主任	藤川 賢
相談・研究部門主任	深谷 美枝
学内学会部門主任	岡本多喜子
所員	浅川 達人
所員	安井 大輔
所員	八木原律子
所員	三輪 清子
所員	野沢 慎司
所員	岡 伸一
所員	佐藤 正晴
研究調査員(調査・研究部門)	阿部貴美子
ソーシャルワーカー(相談・研究部門)	武田 玲子
副手	平野 幸子
教学補佐	高橋 由加
学内学会部門事務担当	込宮美沙子